

首都圏大曲会会報 第34号

# ふるさと大曲

題字 鎌谷一男

令和5年8月発行 発行所：〒162-0054 東京都新宿区河田町6-6 教育情報プロジェクト気付 首都圏大曲会事務局  
電話 03(3341)6339 FAX 03(6273)0081 e-メール：info@e-prosjp.com http://www.supportlife.com



埼玉県富士見市にある国指定重要文化財・旧山崎家別邸。  
6月、青嵐の季節を迎え、小鳥の啼き声だけが響いていた



今も時を告げる川越の°時の鐘、



バラで知られる埼玉県三芳町のピザ屋さん。  
季節には芳醇な香りと共にお客様を迎える



「大曲の花火」春の章 新作花火優勝  
株式会社北日本花火興行

## 「大曲の花火」がやってくる!

### 首都圏大曲会会報 第34号



今年は4月29日に開催された「大曲の花火」春の章 フィナーレを飾った「世界の花火・日本の花火」

「新米のアキタコマチ」をお召し上がりください。

秋田県特別栽培農産物認証

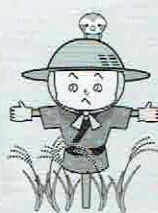
アキタコマチの田植えをする生産者・佐藤久男さん



うちしろさん  
内城菌パワーで  
こだわりの  
有機米  
『アキタコマチ』  
安全・安心  
食感が自慢です。

「アキタコマチの新米は本当に美味しい。今年の収穫が待ち遠しい」と、今井通子様と石川直美様の仲良し親子です。

(神奈川県横浜市港北区)



「佐藤久男さん生産のアキタコマチは、春夏秋冬、いつ食べても美味しい」と、肥後ミツ様。  
(千葉県八街市)



「こだわり米のアキタコマチ」 注文Fax番号: **0187-62-5614**

\*新米の発送は10月中旬になります。

ご注文の方は、どうぞFaxでお申込みください。

お申込みの個所を○でお囲みください。

特別栽培こだわり米	5 kg袋	10 kg袋	20 kg袋
①減農薬 化学肥料不使用 (内城菌有機肥料のみ散布土壤)	3,000円 ( 個)	5,000円 ( 個)	9,800円 ( 個)
送料ご負担分	1袋200円	1袋400円	1袋400円
②減農薬 化学肥料40%使用 (内城菌有機肥料+化学肥料散布土壤)	2,300円 ( 個)	3,800円 ( 個)	7,500円 ( 個)
送料ご負担分	1袋200円	1袋400円	1袋400円
<b>ご注文合計数</b>	( 個)	( 個)	( 個)
品物+送料合計	円	円	円

○ご住所⇒ 〒

○お名前⇒

○電話⇒

◆販売量に限りがございます。売切れの節はご容赦願います。

○お問合せなどのご遠慮なく、お電話かFaxでお寄せください。

〒010-0103 秋田県大仙市高関上郷字高屋敷42 生産・販売者 佐藤 久男  
電話0187-66-1702 Fax0187-62-5614

首都圏大曲会

会費のお振込みにご協力  
有難うございます。

首都圏大曲会会員の皆様方には、いつも会費のお振込みにご協力頂き有難うございます。皆様方からの会費は、会報「ふるさと大曲」の発行を初め諸活動や会維持のため有用に使用されております。ゆうちょ銀行に口座（通帳）をお持ちの方は、お持ちの口座から首都圏大曲会の口座に振り込むと手数料は低額ですが、現金で振り込むとかなり高額になります。現在、振込み番号を申請中ですが認可が厳しく難航しています。なお、市中銀行等に口座をお持ちの方は、りそな銀行の首都圏大曲会口座をご利用下さい。

年会費 二家族（何人でも可）千円  
納入法 ゆうちょ銀行（郵便局）に口座をお持ちの方は、ご自分の口座から、直接、首都圏大曲会の口座にお振込み下さい。

記号 113300  
口座番号 204550001  
受取人名 首都圏大曲会

◆都市銀行等の金融機関から

店名 りそな銀行九段支店  
店番 274  
口座番号 13329364  
預金種目 普通預金  
口座人名 首都圏大曲会

首都圏大曲会会報 『ふるさと大曲』 第34号 目次

特集！ 子どもの頃の思い出

残しておきたい ふるさとの記憶 ..... 4

大友昭三・鈴木 繁・大友律子・築地良仁・田口元也・  
黒皮羽生（佐藤重光）・伊藤瑞子・佐藤 健・大釜茂璋（掲載順）

特別寄稿 ふるさとの大曲を思う時 ..... 今井 幸子 7

コシヒカリ・ササニシキ・あきたこまち・サキホコレの

ご先祖 水稲陸羽 132号誕生物語 ..... 千葉啓之助 12

〈令和五年度〉

大仙市首都圏ふるさと会懇話会開催 ..... 15

◆大仙市役所 訪問

健康福祉部 子ども支援課（子育て支援を充実・強化） ..... 16

会長アピール 「ふるさと貢献」の意味するもの ..... 大釜 茂璋 19

大曲の花火・春の章「世界の花火 日本の花火」 ..... 20

〈ふるさとの話題〉懇話会で老松市長のご報告

「大仙市の最近の話題と新たな取り組み」 ..... 24

東京郊外ぶら〜り散歩 小江戸川越 事務局だより 26

小川 康 23 編集後記 27

（写真・編集協力 大仙市・庄司昌彦・佐藤秋夫・鈴木 繁・飯島陽子、今井馨太郎、順不同、敬称略）

地域の  
元気の  
お役立ち♪



株式会社 タカヤナギ

Tel. 0187-62-1234 (代)  
http://www.e-takayanagi.com

# 残しておきたい ふるさとの記憶

大曲のシンボル・太平山。三角錐に整った姿のこの山は、大曲をふるさとにする人々にとってはお馴染みの、「ふるさとの山だ」(撮影 佐藤 秋夫)



辛かった事、楽しかった思い出、今では全てが懐かしい宝物だ

## 可愛いがつっていた猫との思い出

大友 昭三

私事だがこの一、二年間、いろいろ辛いことがあったので、思い出を綴ろうと思っても思うように筆が進まなかった。

昨年九月に実兄が、今年二月には義兄が鬼籍に入り、とても家族の思い出を書く気にならなかったのが事実である。

この度気を取り直して、子どもの頃、家族同然として可愛がっていた飼い猫の思い出を一つ二つ書いてみることにした。

### 人も馬も同じ屋根の下で

この思い出の頃、私の育った家は茅葺で、築何十年、いや何十年よりもっと古かったかも知れない。私の生家は農家だったから、同じ屋根の下に馬も、猫は当然としても、外の小屋には多くの鶏も飼っていた。

茅葺の家と言うのは、夏はそこそこ涼しく出来ているが、冬は隙間風が吹き抜けて寒さはたとえ様もない。私の家では馬や猫以外にもアヒルや兎も飼っていて、馬はほとんど父や兄が面倒をみたが、猫や鶏などの小動

物の面倒は、私たちの担当だった。中でも猫は、私が中学生の頃までずっと一緒に、兄弟の中でも私に一番懐いていたのではと、今も勝手に思っている。

寒いときは私の布団の中にもぐり込んできて、私も温かく、それは湯たんぽ替わりだった

### 蛇と壮絶に戦った猫

この猫で、強烈に記憶に残っていることがある。真夏の昼過ぎ、焼けつくような陽射しの中、家の前で私のネコが、蛇(種類は、多分ヤマカガシ)と対決し、壮絶な戦いを挑んでいるところを見た。良くテレビ等で取り上げられている、ハブとマンゲースの一戦を思い出させるシーンだ。

ヤマカガシは鎌首を持ち上げて、ネコの顔をめがけて鋭い一撃を喰らわそうとする。これも一度ならず二度、三度と数回繰り返すが、ネコはその都度、右に左にフェイントをかけて身をかわし、蛇の鋭い攻撃を避ける。私一人の観戦者だったが、延々と続いた世紀の対決も、最後はネコの勝ち！。勝ち誇った我がネコが、戦利品の蛇を座敷までずるずる引きずって来たのにはビックリ。ネコは戦利品を

見せて、ご主人様である私に褒めて貰いたかったのだろう。もう一つ、この猫との思い出がある。

秋の収穫時には、作業小屋にうず高く積まれた脱穀前の稲束の山。脱穀作業は積み上げられた稲束を、上から順番に下ろして脱穀機にかける。ところが脱穀作業をしていたその日、下ろしていた稲束の間からネズミの巣が出てきて、これまたビックリ。巣には生まれて間もない、毛も生えていない赤肌の赤ちゃんネズミも数匹うごめいている。どうしたものか。そこで私は一瞬ひらめいた。日向で、のんびり丸くなって眠っている猫を

## 大曲商工会議所

会頭 齋藤 靖

〒014-0027 秋田県大仙市大曲通町1-13  
【本部事業部】TEL 0187-62-1262  
【花火振興事業部】TEL 0187-88-8073  
URL : <https://www.omagari-cci.com>

強引に抱きかかえて、稲束の上  
に放り投げてやった。

慌てて目を覚ました猫は、瞬  
時に理解し、「これはオレ様の  
役目！」とばかり直ちに行動。

あつと言う間に処分してしま  
つた。このときぐらい、使命感  
も言うべき我が家の猫の能力  
に、感じいったことは無い。学  
校から帰って来る私の足音が分  
かるとみえて、玄関を開けると  
待っていてすり寄って来てくれ  
る。家の誰もが出払ってしくん  
とした家の中は殊の外淋しく、  
そんな時、猫の出迎えは嬉し  
かった。

### 隣家に出張した猫

夜中に天井裏でネズミの運動  
会が始まることがある。このと  
きも我が猫の出番だ。嫌がる猫  
を天井裏に放り投げてやると、  
あつと言う間に制圧してくれた  
ものだ。多分、近所の家々で飼っ  
ている大勢の猫の中でも、我が  
家のネコは抜群に優秀な猫だっ  
たと思う。

隣の家から、一晚貸して貰い  
たいと頼まれて出張することも  
あったほどだから。この猫の優  
秀さ、健気さを、改めて思い返  
す昨今である。

(首都圏大曲会 幹事)



### 忘れられない 子どもの頃の遊び

鈴木 繁

誰が決めたわけでもないが、  
それぞれの町内には、町内独特  
の慣習がある。それは子どもた  
ちの世界でも、掟という固い取  
決めというほどではないにして  
も、それぞれの遊び仲間内にも、  
しきたりというものがあつた。

私が七歳の頃、砂鉄を集める  
遊びがはやったことがあつた。  
町内のガキ大将と一緒に、U字  
形の磁石を腰から下げて、ズル  
ズルガラガラ、地面を引きすつ  
て、磁石に吸い付く砂鉄を集め  
たものだった。集めた砂鉄をど  
うしたかは忘れたが、ただガキ  
大将の真似をした行動が楽し  
かっただけのことだ。

それが少し大きくなると、危  
険を危険と思わない遊びに夢中  
になった。花火線香から火薬を  
取り出し竹筒に入れ、紐で縛っ  
てパチンコ玉を詰め、手製のダ  
イナマイトのようなものを作っ  
た。それを友だちと雄物川対岸  
目がけて打ち込み、飛んだ距離  
を競った。それはホンモノの悪  
ガキだった。

### 結婚式の

### 酌取りを頼まれた

昭和二十八年の頃だから、私



酌取りを頼まれて正装して緊張  
の鈴木繁さん

兄は近所の子ども  
たちとバツタ(絵

は十歳、小学3年か4年生だつ  
た。隣の鈴木パーマ屋さん(現  
在も同じ場所にある)にお嫁さ  
んが来た。子どもながらに「な  
んと綺麗なお嫁さんだなあ」と  
思ったものだ。ずらりと花嫁道  
具が運び込まれて、近所の人た  
ちも一どこから来た人だべー。  
なんと綺麗なこども」と噂しき  
り。その結婚式で私は、向かい  
の備前屋(呉服店)さんの十二  
歳だった娘さん(可愛かった  
ナー)と酌取りを頼まれて、三々  
九度をした。子どもながらに、  
紋付袴の正装で、張り切つたも  
のだが、草履が大きな大人用し  
か無く、大層歩き憎くかつたこ  
とを今でも鮮明に覚えている。

### 兄の思い出と 幼なじみとの遊び

佐々木旅館の斜め向かいの有  
坂スポーツ店は、私や十歳違い  
の兄たち仲間の、溜まり場だつ  
た。兄は横手工業高校の水泳部  
の選手で、国体にも出たほどの  
スポーツマンだった。  
夕食が済むと毎晩溜まり場に

出かけて(その頃で言えば  
不良かな)いたが、兄を尊  
敬する弟にとつては、色々  
と勉強をさせて貰った。毎  
週水曜日はきままって近所の  
菅原酒店の娘も遊びに加わ  
り、花札遊びをしたものだ。  
それぞれの持ち点はピーナ  
ツ二十粒で、勝ち負けは  
ピーナツの粒で払うことに  
なる。ピーナツではあつて  
も真剣勝負だった。

センベイ釣りも面白かつた。  
大きなモチセンベイに蜂蜜を  
塗って2枚重ねにし、縫い針に  
糸を通し、十センチぐらいの長  
さにして遠くから刺して釣り上  
げる。これがなかなか釣れない。  
釣れたら釣った人が食べられる  
権利を持つ。子どもたちにとつ  
て、もつとも夢中になった冬の  
遊びだった。

### 優しかった母と 悪ガキだったオレ

私その頃よりもう少し小さ  
な頃のことだ。定かには覚えて  
いないが、これは兄から聞いた  
話だ。兄が遊び  
に行くと言ったら  
母親に「繁を連れ  
て行って」と言わ  
れ、背中括りつ  
けられたという。  
兄は近所の子ども  
たちとバツタ(絵



創業の頃「大曲50番」のフォード製、箱型1935  
年型。購入価、当時の1,500円は清水の舞台か  
ら飛び降りる価格だったと言う

柄は、戦車、飛行機、兵隊など)  
遊びに夢中だったが兄は強かつ  
た。  
戦果として獲得したバツタは  
家の高い鴨居の隙間に並べて隠  
していたが、それは弟に取られ  
ないようにする防護策だった。  
たまに兄の背中、我慢できず  
にオシッコをして、母にシッコ  
タマ(激しく)怒られたこと  
も、今となっては懐かしい思い  
出だ。  
母は八十六歳で他界した。学  
校から帰る途中、ランドセルの  
肩かけが壊れていたのを、冷蔵  
会社の女将さんに声をかけら  
れ、直してもらつた事があつた。  
それを自慢気に兄弟に話してい  
たら母が聞いていて、笑いなが  
ら「お前は丸子橋の下から拾っ  
てきたんだよ」と言うので、スツ  
ゴク落ち込んだものだ。あれが  
「悪ガキ」の始まりだったかな。  
その「悪ガキ」たるの思い出

だ。正月が過ぎて大寒に入り、お寺のお坊さんたちの寒修行が通った寒い夜のことだった。夕食が済み、家族でラジオを聞きながら、話が弾んでいたとき、末っ子の私が調子に乗り、ぐずって騒ぎ、怒った父親に抱きかかえられ窓の下の雪だまりに放り投げられたことがあった。素足で泣きながら、雪だまりから這い出すが大変だった。どこから家に入るべ…。

しかし母親がちゃんと玄関の鍵を開けてくれていたので、そのままこっそり家の中に入った。二階に上がって、敷いてあったシベプトン（稲わらで作った冬用の布団）にもぐりこみ、しゃくりあげながら寝てしまった。

### 懐かしく偲ぶ 若い日の両親の仕事

母は大曲町の電話の交換手だった。今とは違い、情報伝達の先端を走る「紐式交換台」の交換手は、当時の女性職業の花形だったと言う。

父は昭和十二年、個人タクシーの開業申請をして、認可を得た個人タクシー業だった。電話の交換手もタクシー業も、先端を切る職業だった。タクシー会社の電話番号は「大曲50番」。車両は、アメリカ・フォード製の箱型1935年型。中古車

だったと言うが、父親の援助を得て千五百円で購入したと言う。当時、公務員の初任給が七十五円だったと言うから、まさに、清水の舞台から飛び降りるほどの買物だったに違いない。

しかし個人タクシー会社を開業したものの、雪の降る冬期間には自動車の泥上げと言って、エンジン整備のために仕事が出来ず、冬の時期は、花館の大曲農事試験場で働いていた。

戦後も個人タクシー業を生業としていたが、運輸省の指導で昭和三十一年、斎藤、小山、鈴木の個人タクシー三社による、当時の板谷五郎左衛門大曲市長を代表社員として、大曲貸切自動車合資会社をスタートさせた。

その後は、父が代表者となってタクシー業を続けた。現在も経営者は代わったが、「五十番」の愛称で親しまれている。因みに、現在の電話番号も、018(762)0050である。

(首都圏大曲会 副会長)

### 今も心に残る 幼き日の思い出二題

大友 律子

〈その1〉

#### 厳しかった父の思い出

私の父はとても厳格な人とし

て、思い出に強く残る。

戦時中は憲兵だったので終戦となり退役後も、父には長い苦悩の日々が続いたようだ。

私たち、姉と私の二人の子どもには、厳格さばかりが前面に出た接し方で、父と親しく話した記憶はさほどない。

私が小学校2年生の頃の思い出である。父は趣味として、家の門前から玄関先まで約五十メートルほど続くぶどう棚を作って、ぶどうを栽培したこと

がある。それは子どもが目から見れば随分長いぶどう棚だっただけで、父は一生懸命手をかけて育てていたが、その甲斐あって秋になるとぶどうは毎年、立派に実った。長いぶどう棚による父のぶどうの栽培はそれから数年続いた。

ぶどうの品種は、今ではあまり見られない「ナイヤガラ」だったが、私たちは「白ブドウ」と呼んだ。実りの季節になりぶどう棚の下を通ると、いい香りがして、食べるととても甘く、子どもは私たちが大好きだった。

それだけに、収穫がとても待ち遠しく思え、その時は父と親しく話すことが多く出来、そのことが楽しくもあった。

いよいよ楽しい収穫は、私たちの学校が休みの日だった。今思えば、休みの日を選んだことは厳格な父が見せた子どもたち

への愛情だったに違いない。

その日は家族総出で収穫に勤しみ、近所の家々に配る仕事は私と姉の係りだった。少し遠い床屋さんにも持って行くと、とても喜んで貰えた。その日一日は幸せなひと時で、父の嬉しそうな、満足気な顔を見るのは誇らしかった。その後、手入れが大変なことや、家の新築などで、ぶどう棚はなくなった。

父とは、そのイベントでつかの間の共同作業を通して、すこく仲のよい親子関係になれた。

上京後も、果物屋の店先などで「ナイヤガラ」を見つけたらとても懐かしく、あの時の父の姿とぶどう棚が思い出される。

「ナイヤガラ 食む父偲び 思ひ遣(おこす)」

### 〈その2〉 バス通学の苦勞と楽しみ

高校時代の思い出話です。

内小友の自宅から通学は、自転車で大曲農業高校まで二十分程かかった。しかし冬になり雪が降るとバス通学をした。

停留所(内小友農協前)には徒歩で二十分位までのとても不便な所にあり、私以外にもその停留所を利用する人々は大抵十五分〜二十分歩かなければならない場所にあった。バスの時刻は当然決まってはいるが不規則で、特に冬は顕著である。

毎朝、停留所にはものすごく

多くの利用者が集まり、到底バス一台で捌き切れそうもないのに、大曲から来るバスは一台のみだった。当時は女車掌さんを見て、車掌さんはその状況を見て、農協前のタパコ屋さんで電話を借り、「バスの増発をお願いします」と営業所に電話して

いる。やがてバスが二台も到着する時もある。大げさではなく事実だから驚く。そのような光景は毎日の事で、私たちはかなり待たされる羽目になる。

しかしなぜか楽しかった。それは、ワイワイと人々が集っておしゃべりができ、朝ということもあって誰もが一緒に活動的だったから、そのような朝の光景を見ることが、ウキウキして楽しかったと思う。田舎で、人が大勢集まって、思い思いにお話が出来るといこととは、お祭りでもなければ減多

にないことだったから。増発されるバスが来るまでは三十分近く待たされるので、乗客が乗り終わるとバスはノンストップで、「金谷橋」まで走ることもあった。今思えばバス会社は、なんと呑気な采配をしていたものだと思う。そして私たちも何ら苦情も言わず、「しかたねえなあ」と、じっとバスに到着を待っていたのだ。

雪国育ちの純朴な、何とも、

# ふるさとの大曲を思う時

## 懐かしい山や川・鳥の鳴き声

### 今井幸子



今井 幸子さん

ふるさとを思う心も、年齢とともに変化するようにです。

東京に出て早や半世紀。当時の頭の中は、ふるさと恋しさで一杯でした。やがて東京に住み慣れてくるとふるさとは、私の記憶から少しずつ離れ小さくなっていきました。都会が大き過ぎて、そして絶え間なく動いているからでしょうか。

### 特急が走り近く感じた大曲

時が変わり、ふるさとも動き出しました。私が東京に出て来た頃は、大曲駅から上野までたつぷり十二時間は掛かったと記憶しています。次第に列車のダイヤも変わってきて、「特急つばさ」が走るようになると、上野までの乗車時間が八時間に短縮され、ふるさが近くなっ

たと喜んだものです。懐かしいふるさどですが急に身近に感じられたのも、この頃からです。

### 変わるふるさとの景色

それと並行して、ふるさとの姿も大きく変わったことに気がきました。たまに帰ると、子どもの頃歩いた、曲がりくねった砂利道もすっかり舗装された真っ直ぐの道に変わり、夏になると泳いで騒いだ川は改修されて姿を消し、立派に護岸整備されて、水遊び禁止となっている反面、何だか淋しい感じがしました。

春ともなれば「よしきり」のギャギャツ、ギャギャツと啼く声も聞かれなくなりました。子ども頃の林は、立派な田んぼに変わっていました。新緑の頃ともなれば、うるさすぎるほど聞こえたカッコーの鳴き声、スカナ（春先の頃のイタドリ）の別称）に塩を付けて食べると、何とも美味しい新鮮な味。戦後の、お菓子など何にも無い時代、当時の子どもはなんと逞しく生き

たものだと思えます。

秋にはイナゴがいくらでも捕れて、佃煮にして食べていました。今では貴重な珍味として売られています。

子ども時代のことを語ると、文字通りキリがありません。

今私は傘寿も過ぎて病を得れば、ふるさともおいそれと帰れなくなりました。

### 勇気を与えてくれた山々

そんな私には子どもの頃から、辛い時、悲しい時でも、勇気を与えてくれた懐かしい山々があります。生まれふるさとの四ツ屋地区高関は、東山（奥羽



伊勢神宮・五十鈴川の岸辺に立つ今井さん。元気な頃は、お友だちとよく旅行を楽しんでいました。

山脈）と西山（出羽丘陵）が向き合った眺めの良い絶好の地点

でしたから、四季折々の風景が子どもの頃から変わらなず、私の脳裏にしつかり焼き付いているのです。家並みの景色や育った家の姿は変わっても、晴れた朝には東山から輝く太陽が昇り、一日の終わりを告げるかのように真つ赤に染まって、夕日が西山に沈む光景は幻想的でした。年齢を重ねるとともに、鮮明に思い出すふるさとの光景は、消えることがないでしょう。

これが、私が生まれ育ったふるさと「大曲」です。

### 今井幸子さんのこと

今井幸子さんは病氣療養中のところ今年二月十一日、残念ながら帰らぬ人になってしまいました。ご長男である今井馨太郎さんからご連絡を戴きました。今井さんは大仙市高関のご出身ですが、生前、母が使用していたパソコンの中に「思い出のふるさと」があったと、お知らせとともにCDを同封頂きました。お元気を頃、今井さんには首都圏大曲会の活動に熱心にご参加頂きました。謹んで今井幸子さんのご冥福をお祈り致します。（大金茂輝）

✓呑気な思い出話である。都会在住の今では考えられない。子どもの頃と言っても私の高校時代は、そういうのんびりとしたDNAが備わっていたのだ。今ではバスを利用する人も少なくなり、あのような光景もほとんど見ることは無いだろう。若い日の懐かしい思い出の光景である。

（首都圏大曲会 副会長）

### 「月岡劇場」の思い出

—六十年の歴史の中で

築地 良仁

「月岡劇場」六十年の歴史の中で、経営者の次男である私が関わった思い出、劇場の生い立ちなどを振り返ってみた。

### 月岡劇場の生い立ち

一九四六年（昭和21年）、私の父築地武四郎が大曲駅前の地に「大曲映画劇場」を開設したのが始まりである。

翌一九四七年（昭和22年）十二月、館名を「月岡映画劇場」に改称し、後に「大曲東映劇場」、「日本劇場」を増設し3館3スクリーン体制となった。

一九八三年（昭和58年）、大曲駅前の土地区画整理事業に伴い三館を大幅に改装し、新たに「月岡シネマー」（一五〇席）、



月岡劇場、日本劇場の開館披露式典

「月岡シネマ2」(三五〇席)を開館し、一部を駐車場とした。この開館に当たっては、映写機を自動化するなど大幅な合理化に踏み切ったが、観客動員数が年々減少し、二〇〇六年(平成18)十月九日、月岡シネマ1は「ゲト戦記」、月岡シネマ2が「日本沈没」の上映を最後に閉館し、思い出多い六十年の歴史に幕を閉じた。

### 懐かしさと感動と

列車が大曲駅に着き、乗客が群れとなって降りてくると、劇場前のメインストリートに向けて取り付けられた拡声器から聞こえてくる親父の声。

「いらつしやいませ、いらつしやいませ。間もなく、朝第一回目の映画が始まります。お急ぎください。」

今も耳の奥に残っている。そ

の声は、まさしく大曲の街の人の通りが多かった頃の、華やかな「昭和の音」だった。その呼び声は頼もしく格好よく、子どもの中には誇りであり、今もこの年齢になって懐かしく、感動的でさえある。

### お客様ファースト

#### ①同時封切り

人気の映画は、東京と大曲が同時封切りの快挙をやっていた。夏休みや冬休みに東京から帰省してくる学生たちは、東京と同じ映画が上映されているからビックリしていたものだ。

#### ②節分恒例のイベント

2月3日の節分には、お客様への感謝として私たち兄弟姉妹4人が舞台上がり、豆撒きをした。私たちは紋付袴の正装姿に威儀を正し、「福は内鬼は外」の元氣な掛け声とともに、豆と



節分で恒例の豆撒きをした。左から二人目が築地良仁さん

招待券の印を押した軟式ボールを観客席に向けて投げ入れる。舞台の上の私たちも楽しかったが、客席のお客様も大いに盛り上がり大喜びだった。

#### ③「大曲の花火」はホテルに

毎年夏恒例の「大曲の花火」の日は、オールナイトの営業だった。花火が終わって人々は、映画を見ながらホテル代わりに利用したからこの夜は超満員の大盛況だった。夜中の館内は映画はそっちのけで「いびき」の大競演。夜食用の自販機への補充が大変だった。

#### ④オールナイト

毎週火曜日は、リバイバル映画3本立てで、一人二〇〇円だったか格安料金で、オールナイト営業をした。これが大当たりで、とにかく地元映画ファンには大人気だった。

### 環境衛生と館内整備

#### ①水洗トイレ

秋田県内最初の全館水洗トイレを設置したことも強烈に思い出に残る。主に女性のお客様からは、トイレが清潔で綺麗との評判を戴いたことも、強い印象として忘れることは出来ない。

#### ②時代先取りの駐車(輪)場

世の中は徐々に車社会へ変貌して行った。親父はいち早く車社会の到来を見越して、駐車場と駐輪場の拡大に踏み切った。

それは車二十台、自転車は一〇〇台を収容できる、広い駐車(輪)場だった。

### アルバイトの思い出

#### ①繁忙期の呼び込み

正月とお盆は映画館も大忙しだった。その時期は子どもも総動員で手伝いをした。それは劇場の正面での呼び込みだ。子どもが一生懸命呼び込みをしていると健気だと思われたのか、お客さんから声をかけられることもあり嬉しかった。

#### ②自動販売機への補充

館内には自動販売機が設置されていた。コココーラ、ジュース、パンなどが、それへの補充することが仕事だ。マンガ大会など子どもの観客が多いときは、一日数回補充が必要だった。補充用の品を持って3階までの昇り降り子どもには結構きつかった。

### 私が好きだった

#### 印象に残る映画

私は映画が大好きだった。映画館の息子だけに、ただで見られたことも映画好きの原因だったかも知れない。好きだった映画を思い返して列記してみた。

しかし月岡劇場は間違いなく昭和時代、大曲の「近代文化発祥の地」だった。

【東映】時代劇、股旅もの、任

侠映画「仁義なき戦い」「トック野郎」

【松竹】「男はつらいよ」「幸福の黄色いハンカチ」

【東宝】「若大将シリーズ」「社長シリーズ」

【日活】「愛と死をみつめて」「渡り鳥シリーズ」「ロマンポルノ」

【大映】「座頭物語」「眠狂四郎」

【外国映画】「ベンハー」「十戒」

「風と共に去りぬ」「クレオパトラ」「007シリーズ」

(首都圏大曲会 副会長)

### ボーイスカウト

#### 秋田第十五団大曲隊

田口 元也

よく小さい頃の思い出を辿ると、走馬灯の如く心に浮かんでくると言う人がいるが、私にとつて、はるか遠いその頃を思い出すには些か歳をとり過ぎた。

一九五九年十二月、大曲市に初めて「ボーイスカウト秋田第十五団大曲隊」が結成された。私は小学校六年生だったが、結成の前年に募集があり、約三十名ぐらゐの応募だったと思う。

結成までの一年間、五年生の時、ボーイスカウトの基礎知識や活動に必要な技術的訓練が行われ、参加した記憶がある。



ボーイスカウトとは、対象年齢が小学校六年から中学校二年までで、活動を通して社会に貢献できる人格・健康・技能・奉仕を4本柱とした自主性・協調

### 郷愁

黒皮 羽生  
(佐藤 重光)

郷に流れる 小さな川に  
笹の葉船を 流します  
揺れて流れる 笹舟を  
前に後ろに 追いかけて  
歩き疲れた 帰り道  
夕焼け小焼けの 茜雲  
晩夏の風吹く 通学道を  
伸びた稲穂が 揺れてます  
肩に背負った ランドセル  
メダカ探して 遅刻して  
風と走った 幼い口  
夕焼け小焼けの 茜雲  
今もふるさと 心に浮かぶ  
学び校舎の 同級生の顔  
土手に芽を出す 山菜は  
ばっさやに ひろっこ 猫柳  
幼馴染みと 初恋の  
夕焼け小焼けの 茜雲

性・社会性やリーダーシップの育成を目指している。

### ボーイスカウトの「三つの誓い」

ボーイスカウトには、「三つの誓い」という誓いがある。  
一、神(仏)と国とに誠を尽くし、掟(八つ)を守ります。  
一、いつも他の人々を助けます。  
一、からだを強くし、心をすこやかに徳を養います。

この「三つの誓い」は、今でも記憶していて、ときどき語り(ら)んじることがある。

主な活動は、日ごらの共同生活の訓練として、ハイキングやテントを張ってのキャンプなど野外生活、雪上訓練として雪かきやスキー練習、奉仕活動(ボランティア)としては、街頭での募金活動、お祭りでの交通整理、スポーツイベントでプラカードを持つての入場行進、そして国旗掲揚など。

一九六〇年には、秋田県のボーイスカウトが集まって、

「LAKITA JAMBOREE

1960」という大イベントがあり、各地区のボーイスカウトと野外生活を共にし、バーベキューやゲーム、キャンプファイヤーなどで交流をしたこともあった。

### 秋田まじい国体で奉仕

一九六一年に秋田県では初め

ての、「秋田まじい国体」といわれた「第十六回国民体育大会」が、秋田市を中心に、全県各市町村で開催された。

「まじい」と言われた所以は、全国から参加の役員・選手の宿泊施設が確保できず、民間の宿泊に依拠し、そこで生まれたのが「民宿」「民泊」だった。

開催中は学校は休校で、ボーイスカウトは秋田市の八橋運動場の開会式警備や、大曲市では、開催地となった準硬式野球、ハインドボールなどの開会式、会場整理などを行った。開会式の警備では、沿道で天皇・皇后両陛下をお迎えした。

私は、この大イベントを契機にボーイスカウトを引退(中学二年生)した。その後、どうやら「ボーイスカウト秋田第十五団大曲隊」は、国体のイベント終了と同時に解散したようだ。

今もときどき思い出しては、あの当時の活動を懐かしく振り返る。我が少年時代の忘れ得ぬ回想である。

(首都圏大曲会 幹事)

### 乾いた稲の香りと赤とんぼの歌

伊藤 瑞子

小学生の頃のことですから遙かな昔の思い出です。

家が農家だったから、農家の子として育った私は、田んぼで働く大人たちの後に付いて行っ

ては、四季を通して広々とした田んぼが、子どもの頃の私の遊び場だった。特に秋の刈入れ時の田んぼは楽しい思い出が一杯だ。イナゴ捕りや落穂広いなどとともに、真っ青な空の下で、まだ若く張り切っていた両親の姿や、兄弟たちと一緒に過ごした思い出が頭の中を巡る。

秋の刈入れ時には黄色に実った稲が、広い田んぼに乾いた香りを漂わせる。私たち子どもも、刈り取った稲の束をリヤカーまで運び、山のように稲が積まれたリヤカーの後押しをした。

今となって考えると、リヤカーの後押しは、積み荷を下ろして空になったリヤカーに乗せて貰い、田んぼに帰るといっておまげが狙いだったと思う。

土手に咲いている白つめ草で頭飾りや首飾りを作ったり、秋の柔らかい日差しを一杯に浴びた稲の束の上に寝転んだ。乾いた稲の香りが懐かしい。

天上一面に広がる青い空。見ていると吸い込まれそうな高い秋空には、沢山の赤とんぼが飛んでいた。今はあの当時、田んぼで見た赤とんぼの大群はほとんど見ることが無くなった。しかし思い出の中では今も、あの頃の透き通った秋空に群舞する

赤とんぼの大群が飛んでいる。姉の思い出と重なる群舞する赤とんぼ

私には、数年前に亡くなった五歳違いの姉がいた。姉は、通っていた大曲高等女学校で合唱部に入っていて、声も良く、歌が得意だった。その姉が金色に実った田んぼの中で、良く通る伸び伸びとした声で「赤とんぼ」を歌ったことがある。

夕焼け小焼けの赤とんぼ追われて見たのはいつの口か

その歌声が、近くの田んぼで働いていた人たちにも聞こえたと見えて、歌い終わると皆さんが盛んに手を振ってくれた。傍で聞いていた私も、とても嬉しい気持ちになり、頭の上に飛んでいる赤とんぼも、姉の唄う歌に合わせて楽しくダンスをしているように見えたものだ。

歌が上手だった姉を、私は大好きだった。市民会館など集会場などがなかった時代、高校合唱部の発表会が、月岡劇場を借りて開催されたことがあった。姉はその会で「荒城の月」を独唱した。月岡劇場を埋め尽くした大勢の聴衆の前で、姉は堂々と立派に歌い切って盛んな拍手を浴びた。

今は亡き姉の姿を思うにつけ、あのステージは姉の、最高

の親孝行だったと思う。客席で見守る両親にとっても、どんなに誇りに思い嬉しかったことか。今思い出すにつけ胸が熱くなる。

## 小学校の学芸会は地域ぐるみの大イベント

収穫が終わり雪の季節が近づくと、小学校の学芸会は罫見内地区の大イベントだ。学芸会は、体操場に机と教壇を重ねた特別ステージで、各家々ではお重を作って家族で見物し、それは春の運動会同様、地域あげてのお祭りだった。

私の通った小学校は、当時の長野町立罫見内小学校。全校生徒二百名余りの、狭い地域の小さな学校だったが、学校行事がこの地域住民の絆を深め、仲良く過ごす原動力になっていた。六年生の時、小学生最後の学芸会で私たちは「赤とんぼ」のお遊戯をした。その時のシーンは、今も鮮明に残っている。

木村八千代先生のオルガンに合わせて、国子さん、チサ子さん、ひろみさんが舞台西側の袖から、ひさえさんと私は東側の袖からスキップで出て行く。一番は五人揃って踊り、二番はひさえさんと私、三番は西の袖から残る三人が小走りに出て五人で踊る。上は全員赤いセーターでお揃いだったが、下は思い思

いの夏のスカートだった。小さな学校の、記憶に残る大きな宝物。米寿を迎えた今になっても、同級生と語り合う楽しい思い出は、絆の輪を一層強くしている。

## 故人を偲びクラリネットの「赤とんぼ」に涙

義理の兄松橋利助さんが亡くなった。平成十六年九月のことだった。話題はちよつとずれるが、大曲吹奏楽団のコンサートマスターを務め、クラリネット奏者でもある、私の長男・基に

関わる思い出。利助さんのお葬式の最中の事だ。突然、利助さんの奥様が私に、「『赤とんぼ』はお葬式の歌ですよ」と語りかけてきた。「何か。」と訝(いぶかし)げに見る私に奥様は、亡くなる前に主人が、「私の葬式には基くんの演奏でみんな『赤とんぼ』を歌って欲しい」と言っていたとのこと。びっくりして住職さんに相談したところ、住職さんも「それは故人が喜ぶことだから、どうぞ歌ってください」と、お許しくださった。

そこで一番はクラリネットの演奏、二番、三番は参列者皆さんで歌い、四番はクラリネットの演奏で、しめやかに故人を送った。「赤とんぼ」の葬送曲を聴きながら、皆さんそれぞれ亡き人を偲んだ。その時一緒に

歌ってくださった義理の弟藤沢淳さんが、「『赤とんぼ』って別れの歌だよ」としみじみ語っていた。ところがその藤沢淳さんも一昨年、帰らぬ人となった。藤沢淳さんの葬儀の前日、喪主のご長男から、「明日の葬儀では、父のために『赤とんぼ』を演奏して頂けませんか」と、突然依頼されたものだ。

今回は葬儀参列者は歌わず、クラリネットの演奏だけにしたが、しみじみお腹の底から沁み出るようなクラリネットの音に打たれながら、涙とともに亡き

泣き笑いの  
思い出一話

佐藤 健

## (その1) 間一髪の命拾い

小学一年の夏、今思い出しても背筋が凍るような話である。

近所のお兄さんが、ナマズ釣りの仕掛けを教えてくれると言うので、一緒に川辺へ柳を採りに行った。

柳の枝を切るために、親父が大事にしていた小刀をこっそりと持ち出し、ズボンのポケットに入れた。初めは、手に持つ柄を上に入れて入れたが、歩くときに刃先が股に当たりちくちくし

人を偲んだ。

お二方も、赤とんぼの飛び交う季節に逝った。葬儀に参列された方もクラリネットが奏でる荘厳な雰囲気の中で、それぞれ旅立った人を偲んだのだった。

幼い頃、黄金色に実った田んぼの空の下、群舞する赤とんぼを見ながら唄った姉の「赤とんぼ」、そして亡き人を送る悲しみの中で聴いた「赤とんぼ」。私にとりこの歌はどちらも、思い出の歌として深く心に残る。

(大仙市下深井在住)

で痛いので、反対に入れ替えて、刃先を上に向けて歩いた。

無事柳の枝を何本か採ることが出来て、意気揚々肩にかついで帰る途中のことだった。ぐんと小川の流れを飛び越した。その際、向こう岸に着地したとたん足が滑って前のめりに転んでしまった。

運が悪いことに、ポケットに入れた小刀の刃先が腹に突き刺さり、みるみる鮮血が噴き出したものだ。びっくり仰天、鮮血で染まるシャツの上から傷口を押さえて、夢中で家に走り帰った。幸いなことに家には一番上の姉が居て、大慌てで包帯を巻き、病院に連れて行ってくれた。幸い居合わせたお医者さんが急いで傷口の手当をしてくれ

て、ようやくホッとしたが、刺さった位置がもう少し上だったら、心臓だったので、「そうなれば即死だったぞ」と言われ、自分でもゾツとした。もう二度とこんなことは決してしないと心に誓ったものだ。勿論、親父には後で大目玉を喰らった。

## (その2)

## 楽しかった松山でのキャンプ

中学二年の夏、近所の仲間と連れ立って松山でキャンプした楽しい思い出は、今も忘れることが出来ない。

各自で食材やキャンプ用の道具を持ち寄り、目的地の松山に向かった。途中、雄物川で幾匹かの雑魚(さこ)を釣って、山の沢では沢ガニを捕まえ、ワイワイ山に登った。みんな楽しく興奮気味に、やがて目的地の小屋に着いた。早速地面にむしろを敷き、やぶ蚊防止に蚊帳を張って寝床をつくった。次は、このキャンプのメインイベントである食事づくりだ。それぞれ手分けして枯れ枝や枯れ葉を集め、冬用に積まれていた薪を数本無断で戴き、火の支度は万端整った。早速、飯盒でメシを炊き、誰かがかづいで来た鍋で味噌汁をつくった。来る途中で仕留めた雑魚と沢ガニは串焼きにした。みんなが協力した手作りのご

馳走は、仲間と一緒に食べるの大いに盛り上がった。自分たちでつくったものは、質素ではあっても格別に美味しく感じたものだ。

そして焚火を囲み、夜遅くまで大声で歌い合い、夜の山間に吸い込まれていったことも記憶に残る。夜中に多少やぶ蚊に刺されたが、これも楽しかった思い出の一ページに加わり、今も懐かしく残る。

（首都圏大曲会幹事・監査役）

## 我が家の庭のSDGs

大釜 茂璋

当時は子どもがいる家の庭には、食べられる実の生る木を植えたものだった。甘いものなど十分でない時代、それは子を思う親の愛情だった。私の家の庭にも、何時、誰が植えたかは定かではないが、栗の木やスモモの木、西洋梨や桃、柿など。クルミの木もあった。

### 大いに焦った木喰し

小正月に「木喰し（きだめし）」という行事があった。当時は旧暦で正月を迎えた。小正月の頃は雪も深くなる。「木喰し」は、実の生る屋敷の木に今年も沢山実を付けて欲しいと願う、子どもが行う小正月の行事だ。我が

家では、深い雪を分けて長男の私が斧を持ち、二つ違いの弟を従えて行く。私が斧を構えて、「生（な）るか、生らないか、生らないと切るぞー」と言うと、木の蔭に隠れた弟が、「生る！生る！」と言うことになっていった。言わば脅しを加えて、木にお願いする、小正月の子どもたちの楽しい行事だった。

その年は大きな栗の木の下でやった。両親や祖母が窓越しに見ている。私は張り切って大きな声で「生るか生らねえか……」と叫んだが、どこか機械斜めだった弟は、「生らね、生らね」と言う。これは困った。生らないとなると木を切らなければならぬ。そんなことは出来るわけがない。子どもの他愛無い行事ながら私は泣きそうになり、二回、三回と、「生るか、生らないか……」を繰り返したものだ。が、弟も頑固に「生らね」と繰り返す。諦めてこの年の「木喰し」はご破算になったが、年端の行かない兄弟の、大いに困った忘れられない一コマである。

### 鯉職を支えた栃の木

居間から見渡せる中庭には、山つつじの大きな株と並んで栃の木とヒマラヤスギが一本ずつ立っていた。栃の木は、五月の鯉職を泳がす柱の支えとして、大いに役立った。初夏の晴れ間

に、ばたばた音を立て、威勢よく泳ぐ鯉職りに、栃の木は良く耐えてくれた。

両親は教師だったが祖父母の生業は麹製造業だった。そのせいか屋敷の奥には祠があって、お稲荷様が祀られていた。お稲荷様の横に山椒の生垣があり、その前にはグミの木があった。夏には大粒のグミの実がなり、濃い朱色に熟した実は甘く、子どもながら美味しいと思った。子どもはむやみに食べてお腹を壊すことがあると、「お稲荷さんのあたりには大きな蛇が出るよ」と大人たちは策略を講じていたから、子どもたちも滅多にグミの木には近づけなかった。

玄関前の生垣は、低く刈り込まれたスモモの木と、私たちは「小梅」と呼んでいたが、夏ともなると小指の先ぐらいの大きさの実が透明な赤色に熟れて、子どもたちは競って食べた。先に見つけた者が食べる権利を持つので、熟れる兆しが見えると周りの葉で分からないようにして置くのだが、目ざとく弟に見つけられ、涙を呑んだことも何度となくあった。

### 今も凛と立つポプラ

家の横を流れる堰の岸と田んぼに添ってポプラが4〜5本植わっていた。ポプラは成長が早い木で、

すつくと遠くからも望まれて、まるで我が家のランドマークだった。かなり遠くからも見えて、それだけ常に見張ってくれているような気がしたものだ。今でも秋田新幹線（旧生保内線）を走る「こまち」の車窓から遠くにポプラが見えると、実家に帰って来たなと思う気になり、気持ちに安らぎを覚える。そのポプラも古木となり、数年前の強い台風に耐えきれずに倒れたが、今も根元が2メートルは越す大木となった一本だけが、当時の面影を残し凛々しく立っている。

実家は角館街道（現在の105線）から堰端の道を通って五、六十メートル奥まったところにあった。玄関に通じる角に小ぶりな山桜の木があって、近所で一番早く咲く桜として少しばかり私たち兄弟の自慢だった。六月ごろには小さな実が熟して黒くなり、夕方、桜の木によじ登り、熟した実を食べて口の中を黒くしながら、勤めから帰って来る母を待ったものだ。時が過ぎ、庭の様子も大きく変わった。滝のように実を生らせたサクラノボの木も、グミや桃の木も今はない。小梅を取り合った生垣もブロックの塀に変わった。栗の木だけは枝を大きく広げて今も健在だ。栗の実が稔る季節に合わせて帰省すること

も出来ないでいる。私たちも大人になり、祖父母や親が植えてくれた実の生る木は、立派にその役目を果たした。

### 105号線の名所に なった「サクラの木」

その代わりというわけではないが、十五、六年前になるうか。偶然その年の夏休は、兄弟や甥っ子、姪っ子など揃って帰省出来た。そこで末の弟の発案から、みんな庭の各所に桜の苗木を十数本植えたものだ。

今ではその桜も立派に成長して枝を広げ、季節となれば見事な花を咲かせている。家の横を通る105号線からも良く見えて、同級会に参加した折など同級生に、「見事なサクラ。105号線の名所ですよ」と褒められる。食べられる実は生らなくても、国道を通る人々の、目のご馳走には大いになっていくらしい。

近くに住む親戚の主人に管理して頂き、私は毎年、写真で触れるしかないが、植わっている木は変わっても、子どもの頃見たり、経験した我が家の庭の雰囲気は変わっていない。両親は元氣だったし、遙か遠い時代、賑やかに過ごした兄弟姉妹との日常が懐かしい思い出となつて、今も記憶に残る。

（首都圏大曲会 会長）

コシヒカリ、ササニシキ、あきたこまち、  
サキホコレ等のご先祖 冷害に強く食味の良い

# 水稻陸羽132号の誕生物語

首都圏大曲会会員 千葉 啓之助 (ちばみちのすけ)



首都圏大曲会会員の千葉啓之助さん(千葉市在住)から、大仙市発祥、水稻陸羽132号誕生の寄稿を頂きました。今盛んに売り出し中の秋田産銘柄米、「あきたこまち」や「サキホコレ」のご先祖米です。偉大な先達の逸話を交えながら、苦勞した人々の往時を追想したいと思います。

## はじめに

詩人宮澤賢治(一八九六～一九三三)も植付けを推奨した、近代品種の先駆けとなる秋田生

まれの水稲「陸羽132号」誕生物語です。

およそ十年前のこと。テレビ天気予報の歳時記に「かつて東北の盛岡で、詩人宮澤賢治が、



当時の花館村(現大仙市花館地区)にあった頃の通称・農事試験場の正面。ドーム型の屋根がモダンな建物で地方には珍しく、人々の目を引いた。

冷害に強い稲、陸羽132号の植付けを農家に推奨した」との放送を視聴しました。陸羽132号は故郷の花館村(現大仙市)にあった国立農事試験場で、仁部富之助氏が交配・育成した史実を、おぼろげに想い出しました。ともに、氏と同年(明治十五年)生まれなどの縁から交流があった、筆者の祖父千葉福蔵から晩年、交流回顧談をよく耳にしたことが蘇ったのです。

陸羽132号の誕生について調べたところ、インターネット検索から、関連する記事の執筆者西尾敏彦氏(元農林省技官)を知り、西尾氏から詳細な聞き取りと文献収集を行いました。それらは暫くの間手元に置いたままでしたが、最近、先人たちの交配・育成への尽力とその成果を人々の記憶にとどめるため、コシヒカリなどのご先祖陸羽132号誕生物語を纏めました。

冷害に強く食味の良い陸羽132号は、凡そ一〇〇年前の大正年間、欧州からの品種改良技術をいち早く水稲に育成されたものです。

新型コロナウイルスで厳しい自粛生活を強いられた昨今、家庭で食卓を囲みながら、先人たちによる陸羽132号交配・育成の尽力と、続く世代・近代品種育成などご飯の由来を知り、感謝の

念を示すひとときと思いご紹介致します。

## 陸羽132号の誕生

植物交配の第一人者寺尾博技師の指導と仁部富之助技士の交配作業

西尾氏によると筆者が記憶している通り、交配・育成は大正年間、農商務省農事試験場羽羽支場(上の写真)が置かれていた秋田県仙北郡花館村(現大仙市花館)で行われています。農事試験場は昭和四三年、現東北農業研究センター大仙研究処に移転しています。

交配・育成者は新品種育成の第一人者で後に、農事試験場長に就く寺尾博技師の指導を受けた仁部技士が交配作業の殆どを担当しました。交配は大正初期に始まり、作業を繰り返しながら、凡そ七年を経て大正十年(一九二一)に、ようやくにして2粒の新しい種籾を手にする事が出来ました。

前後になりますが、交配作業に先立ちお二人が地域一帯にある既存の水稲品種を広範に行脚し、渉猟した後選定した交配三種は、いもち病に強い陸羽20号と、冷害に強く食味の良い亀の尾4号でした。

稲の開花期になる八月上旬の高温多湿の真夏、交配作業を妨げる風を避けるため工夫した囲いの中で、仁部技士は上半身まの裸になり、作業に精魂込める姿を、筆者の祖父福蔵は度々目にしたと言います。

当時、自然に五穀豊穡を祈願する村祭りの傍ら、日本に導入間もない交配技術である自然科学の力で、冷害に強い水稲に尽力する三十歳代青年の仁部技士の使命感溢れる姿でした。



農林省奥羽試験場の試験田。「亀の尾4号」、「陸羽132号」、「農林1号」の標札が見える。(千葉啓之助さん撮影)

入手できたわずかに二粒の新種は厳冬を凌ぎ、翌年春の田植えの期まで待つこととなります。その間、仁部技士は二粒がネズミによる被害に遭うことを心配して監視することもありました。春になり、シャレーの新種に水を浸したところ見事に発芽しました。これが陸羽132

号誕生の第一歩となりました。これを知る寺尾技師は、陸羽132号育成後に仁部技士の非凡さを讃え、「異常の苦心と努力」と謝辞を述べています。それには東北地域が江戸時代の末、十九世紀の前半期に冷害により稲が不作となった「天保の大飢饉」を経験しているだけに、冷害に強い新品種の育成は、時代の至上命題だったからでしょう。

**陸羽132号誕生の、花館村一帯の地勢と気候**  
花館村は東に奥羽山脈を望み、西の出羽丘陵に沿う平野にあり、出羽丘陵の裾を流れる奥羽山脈の伏流雄物川と、近隣に薬湯が多い田沢湖を源とする玉川が合流する地帯に位置しています。開村は、17世紀半ばに青森藩の参勤交代街道大曲宿場の分宿場としてでした。

冬季は雪深く寒冷。初夏からは奥羽山脈を越えて、時には太平洋の北からの風「やませ」が稲作に冷害をもたらしました。盛夏になると、稲が開花する八月初旬に太平洋の南から高温多湿の風が奥羽山脈を越えて、東北を覆います。

農事試験場の周囲には雄物川護岸から試験水田が広がり、出羽丘陵の狭間からは、鳥海山を遠望する、山水に恵まれた地です。陸羽132号は、こうした地で生まれました。

**仁部技士の生い立ちと千葉福蔵や村人との交流**  
仁部技士は明治十五年、日本海に面する道川村（現由利本荘市）で生まれました。少年期は、野鳥観察を好む孤独な少年でした。

雪蔵銘醸  
出羽鶴

TEL 0187 (63) 1224  
FAX 0187 (66) 2277

伝統の銘酒  
刈穂

大地の恵みとともに  
秋田の心を醸す

http://www.igeta.jp/  
e-mail info@igeta.jp

秋田県大仙市平野谷字天ヶ沢八三〇-一  
秋田県大仙市平野谷字天ヶ沢八三〇-一  
秋田県大仙市平野谷字天ヶ沢八三〇-一

郷泉温泉頭乳

# 黒湯温泉

〒014-1201 秋田県仙北市田沢湖生内字黒湯沢2-1  
TEL 0187-46-2214 FAX 0187-46-2280  
HP <http://www.kuroyu.com>

鳥ならず、「米の収穫は年一回、他に、鶏卵での日銭を得ること」で、村人の生活安定を図る」として、養鶏業を手掛けています。農事試験場の研究者の指導を受ける傍ら、当時の養鶏の本場名古屋に出かけています。交配による鶏の新品種開発を試みたものの断念したのち、大正四年(1915)に「副業養鶏読本」(農事試験場監修)を出版しています。それからも当時の官民協力による村落開発の姿を垣間見ることが出来ます。

### 陸羽132号普及と冷害克服、多くの貢献

精魂込めて手にした種籾の開花生育に続いて、大正の後半から昭和初めを経て、第二次大戦を越えて昭和37年頃まで植付けは広がり、その普及面積は凡そ25万ヘクタールに及びました。食味よく、冷害に強い陸羽132号は酒米に適した新品種としても、農家の植付け意欲を高めたものです。

反面、そこに至るまでの国内外に目をやると、冷害に強い陸羽132号にしても、大正初期・第一次世界大戦(1914~1918)後の経済不況や昭和5年(1930)前後の世界経済恐慌の影響からする日本経

済不況の最中、農民の生活困窮化やその頃の冷風「やませ」の影響を受けて陸羽132号の普及が停滞しました。しかし、東北の凶作」とされる時期に遭遇はしたものの、昭和10年頃には陸羽132号の普及が進み、稲作冷害を解消できたことは、農村・農業のみならず国民生活に安定をもたらす最大の貢献であったと考えます。

この当時、宮澤賢治の冷害をうたった「稲作挿話」の一節で、新品種陸羽132号の植付けを推奨して「君が自分で考えたあの田をすっかり見て来たよ陸羽一三二の穂畝」という句が知られています。そこには、冷害の克服を希求する詩人の、農民とともに生きる姿を見ることが出来ます。

### 陸羽132号を先祖としたコシヒカリ等近代品種

第二次世界大戦後からは交配技術の向上を受けて、各地での新品種育成が進展した結果、陸羽132号をご先祖として育成された品種には、1950年代にコシヒカリ、1960年代から1990年頃までに、ササニシキ、あきたこまち、ヒノヒカリ、はえぬき、ひとめぼれ、つがるロマンなどの近代品種があ

ります。誰もが知る主食米と、さらに2000年代に入り、陸羽132号から生まれたコシヒカリに繋がる多くの銘柄米が交配の親になり、新品種が各地域で開発されています。その一部には、東北農業研究センターで育成された「ちゅらひかり」、寒冷地北海道の道立上川農業試験場での「ゆめぴりか」(2008)、秋田県立農業試験場が2021年に「あきたこまち」の後継として育成した新品種「サキホコレ」(2022発売)などがあります。

### まとめ

当時いち早く交配育種を習得した当市場長寺尾博技師の指導、監督のもと、任部富之助氏は技士として長年、稲の開花期八月には水田に入り込み、厳しい高温多湿の中で交配作業に尽力しています。

それに地域、村人の協力を得て農業研究者を擁する知の社会基盤・農事試験場や自然に恵まれた陸羽132号は育成されました。まさに農事試験場の「知」と、職員による「力」、村人の「協力」、そして「自然」一体の賜物と考えます。このように、農業技術の革新

は、現場から生まれることを知ることが出来ます。陸羽132号の交配・育成は、主食である米の多くの新品種育成に続けられて100余年になる今、農業発展史の、画期的で先駆的業績につながりました。これら先人の尽力、偉業を讃え、陸羽132号の「原種」は現東北農業研究センター大仙を拠点にして、親である交配二種の原種「陸羽20号」と「亀の尾4号」と共に、誕生から今に続き植えつけられています。そこには、時代の期待を受け、精魂尽くした尊い育成の心と歴史があります。末永く人々の記憶に留められると共に、次世代へ続く活力の糧となることでしょう。

これまで述べて寺尾技師と任部技士が陸羽132号の交配・育成を重ねた努力と、後世に続く成果は、生産性を重んじる以上に、経済社会に持続する活力をもたらず、商品やサービスの強力な研究開発が重要であることを教えています。加えて述べらるならば、現下の日本に食料事情の変遷や農業人口の減少による稲作の低迷があるにしても、蓄積された稲作技術と近代水稻品種は、米食や和食の素材として世界に展開が期待されます。

### 千葉啓之助さんご紹介

千葉啓之助さんは大仙市花館出身。現在、千葉市若葉区在住。昭和三十年県立大曲高校卒業し昭和三十六年、東北大学経済学部卒業し、八幡製鉄入社。国内鉄鋼販売従事。製鉄技術販売で海外渡航多数。退社後は関連会社や(株)アジアビジネスセンターを経て、平成六年、宮城県多賀城市にマネージメントサポーター事務所設立。東北の自動車関連産業に関する調査書出版。東日本大震災復興調査研究プロジェクトチームで報告書作成に参加しています。

## 外国人技能実習生受入団体

### だいすき協同組合

代表理事 赤木 達司

TATSUSHI AKAGI

携帯/090-1353-7455 E-mail/do284752@kg8.so-net.ne.jp

□東京本部

〒154-0024

東京都世田谷区三軒茶屋1丁目39-7 ライオンズステーションプラザ三軒茶屋604

TEL 03-6320-0117 FAX 03-6320-8339

# 令和五年度 大仙市首都圏ふるさと会懇話会

## 老松大仙市長も出席

## 首都圏 八ふるさと会集う

大仙市役所と大仙市首都圏ふるさと会が情報を交換し合う懇話会が六月十七日午前十一時半から、東京のアルカディア市ヶ谷で開催されました。この会には、老松市長など市関係者と、首都圏大曲会など八つのふるさと会が参加しました。老松市長から大仙市の近況ご報告を含むご挨拶と、各ふるさと会の活動状況や、抱える課題などを基に意見が交わされました。今年度の幹事は、ふるさと太田会が担当しました。

### 総会の復活など

### 各会とも 活動活発化の兆し

懇話会には今年度の担当幹事ふるさと太田会(男鹿敏昭会長)を初め、首都圏大曲会、東京嶽雄会、首都圏にしせんぼく会、ドンパンふるさと中仙会、東京協和会、ふるさと南外の会、首都圏仙北町ふるさと会の八つの会からそれぞれ2名が出席しました。

会は予定の十二時を前に、ふるさと太田会の男鹿会長の司会で始められました。初めに老松市長から、大仙市の動きとして、

11項目に渡る現在から将来にわたる力強い政策の説明に及びました。市長のご予定も繁忙を極め、質問時間が不足して些か残念でした。しかし、各首都圏ふるさと会もそれに呼応した活動の意欲を持つことが出来ました。(24頁に関連記事)

### 会員の高齢化と 減少化傾向が悩み

懇話会では各ふるさと会から、令和4年度の活動と令和5年度活動案の報告とともに、各会が抱える問題点や課題などについて意見が提供されました。ここ数年、新型コロナウイルスの影響を諸に受けて各会とも活動は休止状態でした。各会が会員間のコミュニケーションに苦勞した状況が報告されました。地元観光地等の写真をはじめ込んだカレンダーや、会名入りのタオルを作って配布したふるさと会もあり、各会の苦勞が偲ばれました。

ナ禍が発生して以来、どの会も新入会の動きが鈍く、会員の高齢化のみが目立つようになりました。交通手段や情報網の発達が目覚ましく、ふるさとが遠く感じる心境に陥ることも少なくなったせいかも知れません。特に新幹線「こまち」が走ったことにより、大仙市と首都圏は日帰り圏となりました。各ふるさと会は、それぞれの母体とする地域に働きかけ、地方から各ふるさと会への応援を働きかけ、年齢層を越えて母体とする地域からの入会を模索する傾向が強くなりました。

首都圏大曲会は規約で、首都圏在住者に限らず、広くからの入会も歓迎し、現にそれに該当する会員も在籍します。

今後は更に地元会員の入会を呼びかけ、相互に情報を共有しながら活動の場を広げて行きます。総会への参加は勿論、会報「ふるさと大曲」への積極的な寄稿など、意欲的に活動に参加出来る方策を模索して行きます。

会報は地元とのコミュニケーションを図るツールとして、価値観を同じくする方策となり得ます。会報「ふるさと大曲」を軸に地元からの入会を呼びかけたいと思います。

次年度懇話会は、首都圏大曲会が担当幹事です。

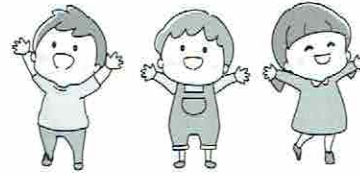


太田地区の大台スキー場から望まれる大仙市の田園風景。遥か遠く、雪を抱いた鳥海山の秀麗が望まれる。(老松市長の大仙市の近況説明の冊子の表紙に掲載されていた。豊かに広がる仙北平野は、懇話会出席の各会幹事からも大好評だった)

ふるさと会の意義は、全会員がふるさとへの思いを同じくして、楽しく語り合えるところにあります。それが、新型コロナウイルス

飛翔する

大  
仙  
市



## 大仙市役所の部署を紹介

部局横断で 子育て支援を充実・強化していく

# 健康福祉部 子ども支援課

結婚、出産、子育てに喜びと安心を感じる大仙市の推進！



健康福祉部子ども支援課のみなさん。前列右から4人目は佐々木隆幸健康福祉部部长、左から5人目が田口美和子子ども支援課課長

子育て支援は平成17年

大仙市誕生時から

重点施策の一つ

最近の日本の人口減少は顕著で、これは国としてのあらゆる勢いを失う衰退の道を辿る方向性の表れとして心配されます。それは大仙市のような中核地方都市でも言えることです。その対策の一つとして子育て支援は、国としては言うに及ばず、地方自治体としても重要な政策として位置付けられています。今号の「市役所訪問」は、大仙市健康福祉部子ども支援課をお訪ねし、大仙市の子育て支援について、田口美和子課長にお話を伺いました。(大釜)



田口美和子課長

相談員も含め31人の

大構成

子ども支援課の職員は、相談員も含めて31人在籍し、主な業務はざっと次の10項目となっております。

- ① 保育園や放課後児童クラブの  
利用申込み・調整
- ② 保育施設の整備
- ③ 子どもの遊び場整備
- ④ 多子世帯の支援
- ⑤ 児童館の管理
- ⑥ 病児・病後児保育園の運営
- ⑦ DV防止策
- ⑧ 子どもへの虐待・DVなどに  
伴う児童家庭相談
- ⑨ 子ども貧困対策
- ⑩ ひとり親の自立支援

ここまでが、子ども支援課の主な業務の紹介になりますが、子育て支援は非常に多岐にわたっています。

政府はこれまで子育て支援の施策を、省庁ごとに実施されてきましたが、ここに来て政府を挙げて総合的に子育てを推進するために、令和5年4月には「こども家庭庁」を発足させており



ます。  
大仙市では、こうした国の動きに先駆ける形で、大仙市誕生の平成17年度当初から子育て支援を重点施策のひとつに掲げ、前身となる「児童家庭課」を設置しました。主たる業務は、子育てに関する諸施策を総合的に



子ども支援課相談員のみなさん。大仙市の、子育てしやすい環境づくりに頼もしい存在だ

分析し、実施してきております。その後、平成27年度に「子ども・子育て支援制度」が施行されたことに伴い、翌28年度には、市民がこの政策により親しみを持っていただけのように、現行の「子ども支援課」に課名を改めて、秋田県内でもトップレベ

ルの「子育てしやすい環境づくり」に取り組んでいます。

## 「子育て会議」の立ち上げ

令和元年度には、「第2期大仙市まち・ひと・しごと創生総合戦略」の策定に合わせ、さらに子育て支援を充実・強化していくため、部局を横断する「子育て支援制度等検討会議」（以下「子育て会議」）を立ち上げております。これは、結婚、出産及び子育てに喜びと安心を感じられる、充実した社会環境の実現を目指しています。そのためには、子育て世帯に寄り添った、切れ目のない支援制度体系の構築に向け、継続的に検討を進めております。

## 顕著な取り組みの成果

こうした取り組みにより、徐々にではありますが成果が現れ始めており、平成18年から毎年実施している「市民による市政評価」では、平成30年に27・5%だった市の子育て施策に関する満足度が、令和4年には50%に上昇し、評価対象29項目中二番目に高い評価となつています。そして令和2年度に実施した子育て等に関する調査では、子育て世帯を含む回答者の約7

割の方が、大仙市は子育てしやすい環境であると回答を寄せています。更には、移住者の皆さんを中心に、他の市町村に比べて子育て支援が充実しているとのご意見を頂いております。

## 「住みよさランキング」で県内トップ、東北では9位

民間の東洋経済新報社が発表した「住みよさランキング2022」において、大仙市は全国812市中109位、東北で9位、県内ではトップの評価を頂いております。

これは、安全・便利・快適・富裕などを総合的に評価された結果ですが、子育てのしやすさが判断された要素が多分に含まれております。これまでの大仙市の取り組みが少なからず、この結果に貢献したものと捉えられます。

この結果を励みにしつつも、評価に甘んじることなく、これからも実際に「住みやすい」と感じて頂けるまちづくりを進めてまいります。

## 子育て支援

### 大仙市今後の方向性

今後の大仙市の子育て支援については、先にも触れましたように、市政評価において公園の

充実や屋内の遊び場整備など、子どもが安心して遊び、行動できる環境を求める声を多数頂いています。それらの声も取り上げながら、これまでも重点的に取り組んできたソフト面の取り組みに加え、ハード面の充実も念頭に置いて、地域全体で子どもを育てる機運を醸成してまいります。それとともに結婚や出産を希望する皆さんを応援し、そして憂いなく、子どもの成長に喜びを感じながら子育てに励める環境を、総合的に整えてまいります。

現状具体的に一例を挙げれば、次のようになっています。

いつもありがとうございます

SHIMADAHAM

ドイツ伝統製法ソーセージ&ハム

株式会社 嶋田ハム

各種贈答品承ります

TEL.0187-62-3278 平日 9:00 ~ 17:00

木登りじまじま。公園で明るく、元気に遊ぶ大仙市の子もたち



【出産祝い金】

〔金額〕国・県・市で合わせて子ども一人に対し、十五万円の祝い金を支給

〔内容〕妊娠届(母子手帳を交付)と、妊娠8か月頃、産後2か月頃などの少なくとも3回、保健婦や助産婦が面談し、お母さんの心や体、育児の相談に応じ、安心して子育てができるよう、経済的支援と一体的にサポートします。

【保育施設整備】

〔内容〕保護者の保育園へ入園させたいというニーズの高まりがあり、年度の途中になると、待機して頂いた状況があります。こうした事態を解消するため、新築や移転改築など施設整

備事業を行う運営事業者に費用の一部を補助して、経営の安定と継続的な保育を支援します。

首都圏大曲会のみな様にも、熱いご支援、ご助言をお願いします

この会報をお読みになる首都圏大曲会のみな様や多くの方々には、大仙市の将来を担う子どもたちの健全な成長と、ふるさと大仙の持続的な発展に向けた未来への投資のために、ご助言、ご支援をお願いいたします。

取材を終えて

子ども支援課の田口課長も触れられています。子どもは

仙市の将来を担う大きな基盤となります。それだけに、将来の大仙市発展を願うみんなの宝物です。この願いは大仙市のみにとどまらず、国としても重要課題として取り組まれております。現政府の「次元の異なる少子化対策」もその一環で、この対策実現にも多くの難題を抱えているようです。そして今年四月一日、こども

家庭庁の発足も、この課題に対する政府の本気の取り組み姿勢を物語るものでしょう。具体的には児童手当の拡充や保育士の処遇改善、児童保育施設の改善・拡充など、出産から子育てに関わる一切を支援対象となっています。

た。それが人々の生活の上で顕著な魅力となり、大仙市が住みよい地方都市として、全国でも上位にランクされる要因となっているのです。これは首都圏に住み、大仙市をふるさととする私たちにとっても、大変嬉しく誇りに思う一つです。

子ども支援課を中心に、部局横断の力を結集し、益々魅力あるそして、他地域に住む人々に羨ましがられる大仙市に成長して頂きたいと思いました。「ふるさと貢献」を信条とする首都圏大曲会も、心から応援しています。

(大釜茂璋)



上は、伸び伸びと屈託なく公園で縄跳びに興じる園児  
下は、春先、先生の指導のもとに野菜の苗を植える園児たち。秋の収穫が楽しみ

本醸造生貯蔵酒

ひでよし——ひょうたん

お酒を注ぐ時に聞こえる「ひでよし」という音も、より一層お酒をおいしく感じさせてくれます。軽快な口当たりと爽快感をお楽しみ下さい。

未成年者の方にはお酒をお販売しません。

（名）鈴木酒造店  
大仙市長野寺二丁目9  
電話0177-662117

300ml ¥396(税込)

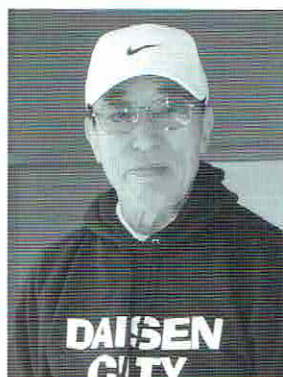
# 会長アピール

## 首都圏大曲会の信条

# 「ふるさと貢献」の意味するもの

## ふるさとを愛する一人一人の行動である

首都圏大曲会会長 大釜茂璋



大釜会長

### 血を熱くしたWBCの優勝

今年三月に開催されたWBCの侍ジャパンが、堂々勝ち取った優勝は、久々に日本人の気持ちを一にする喜びを与えてくれた。

大谷翔平選手やダルビッシュ有選手、佐々木朗希選手など、東北の地で育った選手たちの目覚ましい活躍で勝ち得た世界一だけに、東北出身者の血をたぎらせた。

野球と言えば2018年夏の甲子園、吉田輝星投手の快投で「金足農旋風」を巻き起こした金足農高の活躍も忘れることが出来ない。勝って堂々胸を張り、力の限り校歌を歌う選手たちの姿に、郷土秋田を誇りたいものだ。あの時は、身も心も秋田に里帰りし、手に汗握りしめ「それ行け、金農！」と応援をして、一喜一憂をした。

あの年は「大曲の花火」でも、金農野球部の健闘を讃えた花火を打ち上げた。郷土愛溢れる祝福の花火に、観衆席から万雷の拍手が鳴りやまず胸に迫るものがあった。

### ふるさと会は郷土愛がモットー

首都圏大曲会活動の信条とすると、これは、「ふるさと貢献」に尽きる。その精神は、ふるさとを愛し、ふるさとを尊敬する会員一人ひとりの気持ちのなかにある。秋田県は勿論、東北の空気を吸い、白河の関から北の風俗習慣の中で育ち、生きて、価値観を等しくして成人となった東北人。その活躍を喜ぶ心を持つことは、「ふるさと貢献」の信条に通じる素直な姿勢だ。

先日、高校時代の友人と久し振りに語り合う機会があった。テレビの天気予報を見るとき、当然首都圏の予報は見るが、次に見るのは秋田の予報だ。目が自然に追いかけてしまふと笑っていた。

秋田で生まれ育ち、親や兄弟姉妹、友人たちと過ごした喜怒哀楽。それがそのまま、ふるさとで過ごした自己史である。

### 気楽に「ふるさと貢献」を

先日、新型コロナ禍で久しく会うことがなかった首都圏大曲会の会員と、都内の居酒屋で会った。四年ぶりだった。子どもの頃の思い出話に花が咲き、つい閉店近くまで呑んだ。友人が「ふるさと貢献」が会の信条であることは知っているが、一体俺がふるさとのために、何をして貢献できるかを考えると悩ましいと言う。

もはや戦後ではないと言われる、経済成長が著しかった昭和三十〜四十年代、金の卵としてもてはやされ、若者がこぞって東京など首都圏を目指した時代。彼も集団就職組の一人だった。秋田人らしく黙々と努力し、今は立派に身を立て、小さいながらも会社の経営者だ。気が付いたら六十余年が経過していた。そこで私は話した。「ふるさと貢献」は、人それぞれの心の中にあるのだ。確かに「ふるさと納税」も大事な貢献の一つであるが、このように夜の更けるのも忘れて生まれ故郷の思い出話に耽ることも、立派な「ふるさと貢献」になるのだ。春夏秋冬、美しいふるさとの光景を思い浮かべるだけでも、そしてまた、大仙市を訪れたことの無い人に、大仙市の魅力を熱く語り伝えることも、立派な「ふるさと貢献」である。

大仙市は花火のまちだ。「大曲の花火」の、大会の素晴らしさを熱く語り、一度行って見たいと言う気にさせることも、他の地出身の人には出来ない「ふるさと貢献」だ。アキタコマチ、サキホコレなど優れたブランド米、酒の本場、秋田美人など自慢話は尽きない。大仙市中仙地区発祥の「ドンパン節」でも威勢よく唄っている。

自慢コ言うなら 負けなぞ

米が本場で酒本場

秋田のおなごは日本一

小野小町の 出たところ

若手花火作家の登竜門

# 大曲の花火 春の章

新作花火コレクション

世界の花火 日本の花火

今年春の章では競技の部として、花火作家の部、10号芯入り割り物花火の部、新作花火の部の順で行われ、初夏を前にした雄物川河畔の夜空に、8000発もの花を咲かせました。

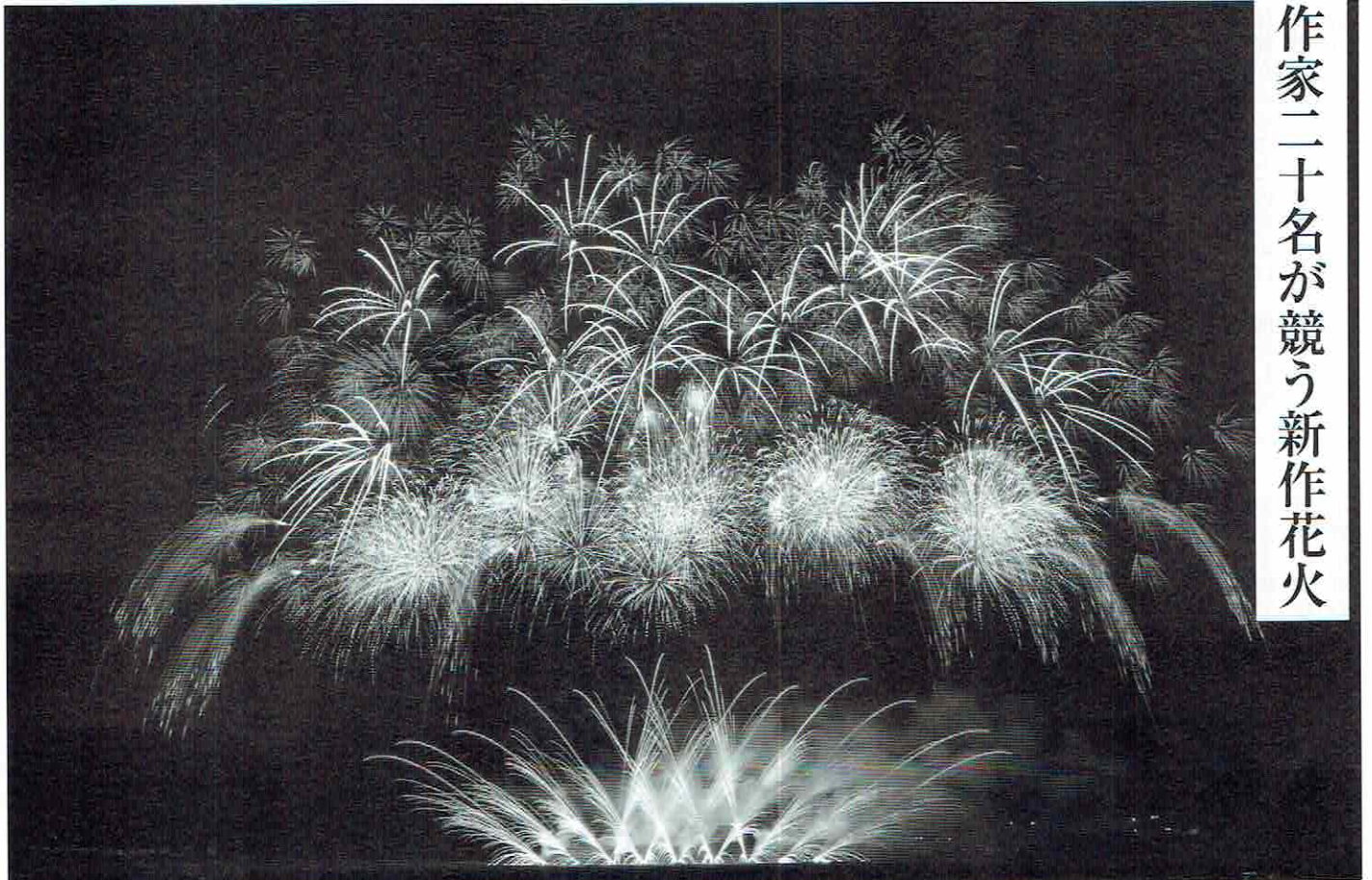
それとともに、「世界の花火、日本の花火」と銘打つ国際色豊かな花火大会で、今年もカナダからFire Works 'Ex社が招かれて、国際色豊かな花火のコラボレーションとなりました。

大仙市大曲は「花火のまち」。春夏秋冬、季節ごとの花火で賑わうことで知られます。今年も「大曲の花火・春の章」が四月二十九日午後七時から、雄物川河畔の「大曲の花火公園」で開催されました。この春の章は、全国から選抜された新鋭気鋭の若手花火作家が、日頃研鑽の腕を見せようと、文字通り精魂込めて打ち揚げる、新作花火の発表の場と化した若々しい華麗な花火大会です。

この春の章は、全国から選抜された新鋭気鋭の若手花火作家が、日頃研鑽の腕を見せようと、文字通り精魂込めて打ち揚げる、新作花火の発表の場と化した若々しい華麗な花火大会です。

芯入割り物の部優勝作品(株山崎煙火製造所)  
昇曲導付三重芯菊先銀点滅 佐々木 恵

全国から選抜の若手花火作家二十名が競う新作花火



七色の宝石をちりばめて夜空に映える創造花火(響屋大曲煙火)

花火と光で巡る花火紀行(ヨーロッパ) La Via en rose



彩も鮮やかに、飛び散る光に観客の拍手が鳴りやまない(株小松煙火工業)  
創造花火 花火と光で巡る花火紀行(アジア)歓喜の舞・Malhari

軽快なテンポで大曲の夜空に舞い踊る(株北日本花火興行)  
新作花火優勝 朝霧に光るクロード・モネの庭

全国花火競技大会「大曲の花火」は今年第95回を迎えました。毎年、東北地方の夏まつりを締めくくるように、8月の最終土曜日の開催ですから、今年も8月26日、大仙市大曲地域の雄川河畔「花火公園」で、次のよ

## 第95回全国花火競技大会 8月26日「大曲の花火」今年も盛大に開催

うに盛大に開催されます。

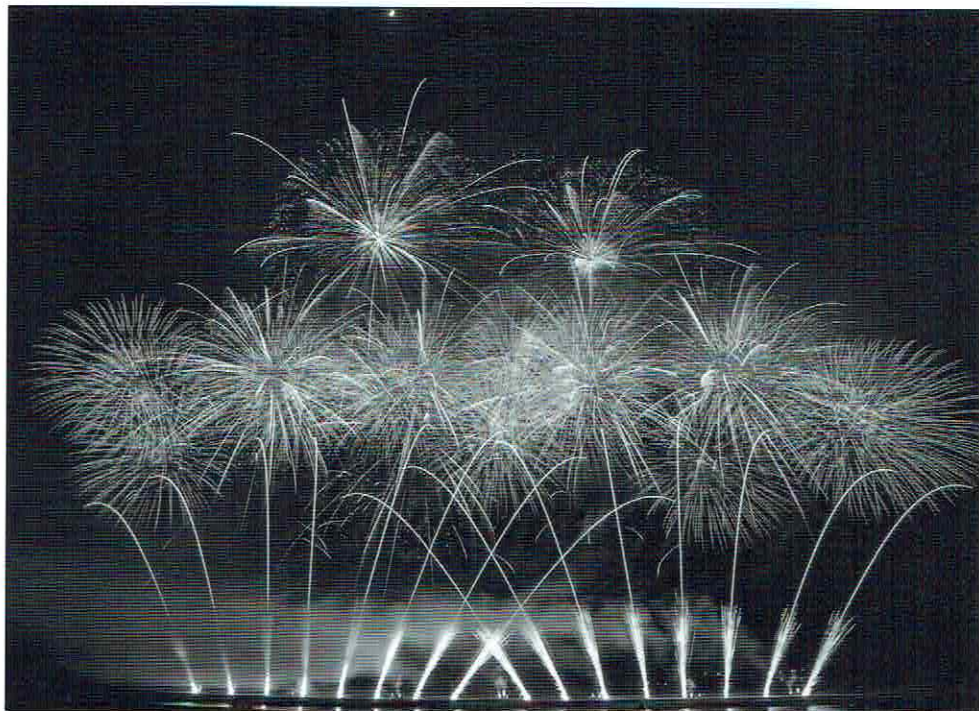
〔昼花火の部〕

17時10分～18時

〔夜花火の部〕

18時50分～21時30分

明治43年から続く「大曲の花火」は、全国の名だたる28社の



フィナーレ「世界の花火・日本の花火」大仙市の花火師とカナダの花火師の合作

### 『ふるさと大曲』第34号

令和5(2023)年8月5日

編集人：首都圏大曲会 発行人：大 釜 茂 璋

〒162-0054 東京都新宿区河田町6-6

教育情報プロジェクト気付

電話：03-3341-6339 Fax：03-6273-0081

eメール：info@e-prosjp.com <http://www.supportlife.com>

印刷・製本：秋田協同印刷株式会社

花火師がその腕を競い合う、伝統の全国花火競技大会です。内閣総理大臣賞を筆頭に、数々の賞を競い合う、全国の花火大会でも屈指の権威ある大会として知られています。今では全国的にも珍しくなった。昼花火。もあります。

まんまんと流れる雄物川河畔から西山をバックにしたロケーションの中で行われる「大曲の花火」を、どうぞお楽しみください。

パンフレット・ポスター・  
冊子印刷&製本など

# 印刷のことなら 何でも ご相談下さい。

原材料の仕入・固定コスト等、  
秋田の立地を最大限に生かし  
低価格・高品質の商品を  
お客様にご提供すべく、  
日々精進を致しております。

首都圏のお客様にも秋田協同印刷のモットーとする  
『すべてはお客様のために』を『すべてのお客様のために』!  
是非お感じ下さい!

ご連絡を頂ければ飛んで参りますので、  
お気軽にお問合せを宜しくお願い申し上げます。

## 秋田協同印刷株式会社 首都圏担当

〒154-0024 東京都世田谷区三軒茶屋1丁目39-7  
ライオンズステーションプラザ三軒茶屋604

TEL.050-5820-4764

FAX.03-6320-8339

# 東京郊外 ぶら~り 散歩

## 小江戸 川越を訪ねる①

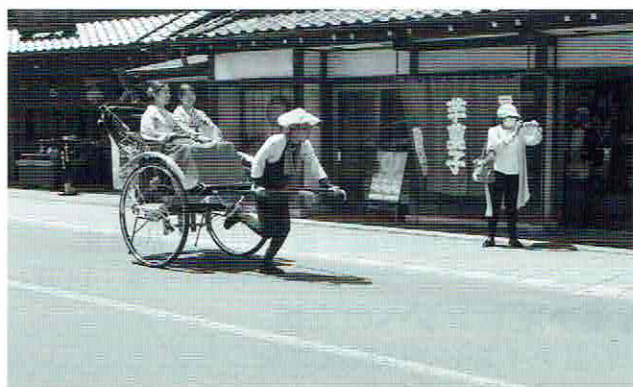
都心から電車で僅か一時間

# 江戸の歴史が今に残る街！

旅人 小川 康やすし  
(埼玉県富士見市在住)



梅雨晴れの好天気に誘われて、小江戸・川越の町は観光客で賑わっていた



着物姿の女性観光客を乗せて人力車が颯爽と通り抜けた

江戸の風景を今に残す埼玉県川越市。東京都心から電車で僅か一時間足らず。古い蔵造りの町並みは、江

戸の昔にタイムスリップしたようにしっとりと落ち着き。小江戸川越として多くの観光客で賑わっています。

春は新河岸付近の桜、夏は花火大会、秋は川越祭りなど、多

くの祭りやイベントが、季節ごとに街の表情が変わりつつ訪れても新しい魅力が

味わえる町です。梅雨晴れの一日、埼玉県富士見市にお住まいの小川 康さんに「小江戸川越」を、ぶら~り訪ねていただきました。

姿で人力車に揺られる若い女性も、このまちに良くマッチしています。川越のランドマーク「時の鐘」(表紙に掲載)は、江戸時代初期に建設されたと伝えられています。今は一日4回(6

喜多院には三代將軍徳川家光の誕生の間や春日局の化粧間などが移築されている



徳川家との所縁の深い古刹・喜多院は、5百羅漢でも知られる。初夏の光を浴び羅漢さんも賑やかだった

時、正午、15時、18時)に、江戸時代を偲ばせる由緒ある音を聞くことが出来ます。徳川家と所縁も深い喜多院など文化財や史跡豊富な川越ですが、近代風の市立博物館や美術館も充実しています。それは次号でご紹介します。



江戸情緒を味わえる観光のまちだけに、街の辻々には所番地と主な観光場所の案内が立っていて、初めての方でも迷うことはない

## 「大曲の花火」の海外展開

### ■第18回国際花火シンポジウムへ参加

- 2023年4月24日～28日、マルタ共和国で開催
- 各国の花火関係者へ「大曲の花火・日本の花火」をPR
- インバウンド誘客と「大曲の花火」の海外展開を、今後さらに展開

## 地方創生へのチャレンジ

### ■スポーツと観光・文化を一体化の地方創生

- 多目的人工芝グラウンド「ふれあいスポーツランド・ソラーレ」が完成
- 当エリアを拠点とした地域活性化・交流促進活動の展開
- スポーツ ツーリズムコミッションによる官民一体となった取組の実施

## 持続可能な「強いだいせん農業」の実現

### ■スマート農業の推進

- (株)クボタ、(株)秋田クボタとスマート農業等に関する連携協定を締結
- GPS 衛星、高精度自動操舵付きトラクター、農業用ドローン等による各種水稲直は栽培の実証
- 農業後継者育成のための農業機械・農作業安全研修会の開催

## 国際交流の推進

### ■韓国唐津市との交流

- 令和5年4月22日～24日の日程で、『機池市綱引き祭り』に参加
- 平成15年から刈和野の大綱引きが縁で交流開始
- 共通の伝統文化「綱引き」を通じて交流

### ■台湾新北市中和区との交流推進

- 中和国際青年商會が表敬訪問  
(令和5年5月29日)
- 8月に教育交流推進。訪台予定
- 大曲青年会議所と中和国際青年會が姉妹締結

## 地域全体の元気づくり

### ■大仙市アカデミーの開催

- 市民が主役のまちづくり講座の開催
- 各界第一線で活躍されている方々を講師として招待

## 子育てしやすい環境づくり

- 1歳児までの保育料無償化の検討
- 託児サービスの充実検討
- 基幹(地域拠点)公園の機能充実

- 屋内遊び場施設の整備検討
- 太田ふれあいの里の複合遊具の更新



## 安全・安心なまちづくり

### ■空き家の現状と対策

- 一歩踏み込んだ空き家対策の実施
  - ・空き家解体補助制度の拡充(令和3年度～)
- 補助上限額:50万円→100万円に増額所得要件の緩和、資産要件の廃止 等

## 商工業の振興

### ■地元企業への支援

#### ■地元企業の設備投資を積極的に支援

- 地元企業の工場新設・設備投資が活発化  
(令和5年度:14件)

### ■起業チャレンジへの支援

- 若者チャレンジ応援補助金  
(令和4年度:4件採択)
- だいせん Labo(令和4年度:10件成果)
- 大仙市創業支援助成金 年々申請が増加

## 成長戦略の推進

### ■デジタル変革(DX)の加速

#### ■行かなくても済む市役所・書かない窓口を目指して

### ■今後の重点的な取組

- 様々な行政手続きのオンライン化
- 「ワンストップ窓口」の実現
- 市職員向けDX講演会の開催(令和4年12月8日)
- 市窓口のキャッシュレス決済導入(令和4年10月～)
- マイナンバーカードを利用したオンライン申請  
(令和4年10月～)
- コンビニ等での証明書児童交付(令和5年1月～)



職員向けDX講演会  
(講師:武蔵大学 庄司昌彦教授)



# ふるさとの話題 大仙市首都圏ふるさと会懇話会

## 老松市長のお話しから

# 「大仙市の最近の話題と 新たな取り組み」

### 文化観光振興・地域活性化

#### ■将棋界最高位タイトル戦の招致

(令和5年12月6～7日対局予定)

- 第36期竜王戦七番勝負第6局が、角間川町の旧本郷家住宅で開催決定
- 『勝負めし』も含めた『食のプロジェクト』など関連事業の実施により、大仙市をPR



第35期 藤井聡太竜王



旧本郷家住宅(外観)



奥座敷(対局室)



洋館(控室)

#### ■秋田犬最高峰イベントの開催

- 第147回秋田犬保存会本部展を大仙市で開催(令和5年5月3日)

#### ■中里温泉の改築

- 市民健康増進の拠点
- 市内外の交流促進の拠点
- 令和6年11月 仮オープン
- 令和7年4月 グランドオープン

#### ■大仙市東部エリアの観光開発

- 「真木真昼県立自然公園」・「太田四季の村」を拠点とした文化観光コンテンツの開発
- 「アウトドア アクティビティ」の確立



### 文化財の保存・活用

#### ■新たな国指定重要文化財の誕生

- (令和4年12月12日指定)
- 内小友地区の佐藤家住宅が国指定重要文化財に指定
- 今後の保存・活用について、当主・佐藤公一氏と協議の上、支援

#### ■仏画家 鈴木空如の生誕150年

- 生誕150年を記念し、法隆寺聖徳会館で、鈴木空如筆「法隆寺金堂壁画」を展示(令和5年11月～)
- 展示の様子と、鈴木空如の画業と人となりを紹介する映像制作及びその放映
- 「悠久の絆 奈良のみほとけ展」(令和5年4月～)
- 太田文化プラザを中心に市内外で特別展示

## ■SDGs 未来都市(令和4年5月20日選定)の実現

### さらなるSDGsの浸透と機運醸成

- 「SDGs 取組宣言プロジェクト」の実施  
→大仙市、市民や企業、団体が実施するSDGsの取組を広報・HPなどで紹介し情報発信を強化
- 東北SDGs啓発シンポジウムの開催
- 注力する継続的な取組



## ■グリーン社会の実現・推進

### 2050年カーボンニュートラルに向けて

- エネルギー使用量の削減
  - ・住宅・建築物の省エネ化
  - ・次世代自動車の普及促進

- ・EV・PHEV車購入・充電設備設置への助成(ゼロカーボンシティ推進事業)
- 再生可能エネルギーの最大限の導入
  - ・多様な地域資源の活用
  - ・地産地消の再エネ導入
  - ・アンモニアン燃料により発生する電気・熱を施設園芸作物の周年栽培に利用する実証事業の実施→『脱炭素先行地域』の指定を目指す



大仙市柏台太陽光発電所



公用車の電気自動車導入事業



## 首都圏大曲会

### 事務局だより

新型コロナウイルスは今年5月8日以来、感染症の5類に移行されて、「濃厚接触者」として特定されることなくなくなりました。しかし新型コロナウイルスが消滅したものでもなく、私たちは十分注意しながらも恐れることなく、普段通りの社会生活を送りたいものです。

令和4年度、首都圏大曲会は新型コロナウイルス禍をともに受け、前年と同じ様に総会や親睦会など会員同士が対面での活動はできませんでした。

そのため首都圏大曲会は、会員との唯一コミュニケーションの手段として、会報「ふるさと大曲」を6月に臨時増刊号を発行し、9月に第32号、12月に第33号を発行しました。私たちの生まれ育った旧大曲市は、その後大仙市として生まれ変わったことはご承知の通りです。しかし幼い頃に眺め親しんだ自然の姿や、親、兄弟姉妹、一緒に学び遊んだ友人たちの思い出は、尽きることがありません。そこで会報では、その尽きない思い出を書いたり語ったり、それぞれのおふろさへの思いを深くしました。会員からの投稿や大仙市役所の部署訪問など、多くの方々の

声を載せて会員の絆を図りました。

令和5年度は、8月5日、待望の総会兼親睦会を開催し、来年2月に、「東京で大曲の花火」を観て「みんなでカラオケを楽しむ会」を開催いたします。「大曲の花火」は、今や大仙市の地で開催する国際的な花火大会として、広く知られています。

そこで、東京で開催するこの会を、大仙市首都圏ふるさと会の皆さんにも呼びかけて、みんなで大仙市の「大曲の花火」として、ふるさとを偲びたいと思います。また首都圏大曲会会員のみなさんには、信条の「ふるさと貢献」の意味からも、知人、友人にも参加を呼びかけて頂きたいと思っております。

会報第34号(8月)、第35号(12月)を発行します。

### 令和5～6年度

#### 新幹事選考について

ご承知の通り、首都圏大曲会の規約では、幹事の任期は2年となっております。従って今年度は、新幹事選出の年に当たります。今年5月30日現在、新幹事の自薦も他薦もありませんでした。そこで、新型コロナウイルスの影響も配慮し、会長提案により、現幹事にそのまま残存を幹事会に提案し、総会議案書通り、総会に諮ることにしました。

## 首都圏大曲会 令和4年(2022年)度 会計報告

【令和4年5月1日～令和5年4月30日】

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	189,151	通信費	93,414
年会費収入	122,000	諸印刷費	265,394
広告掲載費収入	203,460	広報費	17,724
大仙市助成金	150,000	消耗品費	24,403
		懇話会出席費	14,000
		雑費	7,778
		次期繰越金	241,898
合計	664,611	合計	664,611

### 令和4年度 監査報告

令和4年度の収入及び支出について、会計帳簿及び関係書類の監査結果、適正に処理されていることを認めます。

監事 佐藤 健



## 首都圏大曲会 令和5年(2023年)度 予算案

【令和5年5月1日～令和6年4月30日】

収入の部		支出の部	
前期繰越金	241,898	総会費	900,000
年会費収入	80,000	会議費	45,000
総会費収入	960,000	通信費	90,000
東京で花火を観る会	325,000	東京で花火を観る会	300,000
広告掲載収入	238,500	ふるさと会参加費	70,000
大仙市助成金	150,000	諸印刷費	250,000
		広報費	10,000
		消耗品費	59,000
		雑費(総会景品代含む)	45,000
		次期繰越金	226,398
合計	1,995,398	合計	1,995,398

### 編集後記

▼雨に風につけても思い出すふるさと。数十年前、小学生時代に教わった高野辰之作詞「故郷」。あれから何十、何百回、この歌を唄ったことか。それは軽い鼻歌だったり、思いを込めて半分涙声だったり。今年七月、秋田に集中豪雨。雄物川が氾濫というテレビ報道には、目と耳を釘づけに集中させた。子どもの頃も大洪水は何回となく経験しているが、離れた土地で聞く故郷の災害は、実情が見えないだけに不安と心配が募ったものだ。▼新型コロナウイルス禍に席捲されたここ数年だったが、絶滅はしていないがどうやら盛りの時のような暴れ方は静まった。ふるさと会のような、思いを同じくする人々の会は顔を合わせておしゃべりを楽しんでこそ価値が膨らむ。この数年間の経験がその思いを強くさせた。「やっとなんかに遭える。待ち遠しかった。楽しい」と、出席の葉書に添え書きしてくださった方もいて嬉しかった。▼ふるさと太田会の幹事で六月十七日に、「大仙市首都圏ふるさと懇話会」が開催された。ふるさとを離れて暮らしていても、ふるさとの思いに馳せる大事な会である。老松市長による「最近の大仙市の話題」が、現況を知る手がかりとして強く印象に残った。来年度は首都圏大曲会が幹事である。

▼花館出身、千葉啓之助さんが、「ご先祖 水稲陸羽132号誕生物語」を寄稿してくださった。売出し中のアキタコマチやサキホコレは、偉大な先人たちの努力の結晶であることを伝えたい千葉さんの気持ちがあることほどよく理解できた。かつて花館にあった農事試験場を懐かしく思う人も少なくない。

(大笠)



# 憩い 安らぎ 癒しの宿

## 秋田・十和田湖・八幡平国立公園

ここ乳頭温泉郷は、七湯の、素晴らしい良質の宿が点在しています。中でも妙乃湯は、関西から見た東の「金泉・銀泉」の二源泉を併せ持った誇れる宿です。また、こじんまりした秘湯の素朴さ、古きに新しさのバランスを備えた趣のある宿として大変喜ばれています。

014-1201 秋田県仙北市田沢湖生保内字駒ヶ岳2-1  
電話0187-46-2740



夏瀬温泉  
都わすれ

## 秋田・田沢湖・抱返り溪谷 県立自然公園

田沢湖と角館の中ほど。紺碧の湖や溪流を見ながら緑に染まる木立の道を進みます。広い敷地と周囲の山々に包まれた「都わすれ」は、客室わずか10室。全室抱返り溪谷を見ながらのかけ流し露天風呂付きという、人里離れた理想の、くつろぎの宿です。

014-1113 秋田県仙北市田沢湖卒田字夏瀬84  
電話0187-44-2220